
S.D.F.ZERO (1.5)

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S. D. F. ZERO (1. 5)

【Nコード】

N89250

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

関東平野一帯の崩壊から数日後、日本各地が次々と崩壊していく。有奈は自分を見失い廃人になっていた。未来人キールは有奈を守りながら崩れ行く日本列島を南下する。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであろうか。

(前書き)

この小説はフィクションです。実際の人名、地名、団体名とは関係ありません。

私は生き残った…多くの人がこの数時間で死んだ中で。何故私。「死ぬ勇気がなかったから？」それとも「私の人生にやり残しがあるから？」無常にも陽はまた昇る。それは、世界がどんなに荒涼としていても変わらない。そして、この目に宿す色が無くなるうとも、光だけは皮肉なことに消えてくれない。もうやめて…私は走れない。いつか夢見た世界は闇の中へ閉じる。

>旧名古屋市街08・06・18

傾いたビル群や地面に垂れ下がった電線、コンクリートやガラスの破片、アスファルトを裂く地割れ。それらをオレンジに照らす夕日は残酷で平等だ。しかし、闇夜へ向かうこの街には灯りはない。2日前までここにあった街はもはや存在しない。俺は絶え間なく降り注ぐ地獄の灰から逃れるようにしてここへ流れ着いた。いや、俺たちと言った方が正しいか。その相方というか、少女は弱冠18歳の割に、人形のように白い肌と対比するように黒い髪の幼い感じだ。そう、この少女は数日間地獄を見続けたために本当の人形のように無表情、無反応になってしまった。俺が銃を片手に難民から食糧を奪おうが、車をかっぽろうが、この娘は何も言わないし、何もしなかった。だから難なくここまで逃げて来られたのだが、俺はどうも腑に落ちない。ただでさえ、警察すら機能しない国家なき無法地帯で生きるだけで神経を使うのに、人形のような少女と一緒に死のドライブなんて鬱だぜ。無法なんだから俺がこの娘をどうにでもできるだろう…と愚かにも考えた野郎はもう死んでいる。この娘が手離すことない妖刀『三代虎徹』。日本刀にしては長いワザモノは別名『血吸い刀』と呼ばれ、使用者に血の雨を浴びせ続けるという曰く付きだ。人殺し虎徹は少なからずこの少女の人格崩壊に結びついてる。この娘が俺と出会ってしまったことも、あのおっさんとこの

娘が武器交換したことも、この娘が父親の研究所で数人を殺傷したこともたぶん運命なのだろう。ついでにこの娘は震災前、ただの高校生だった。ふつうの人間がヒトを殺しておいて精神を保てたら、例え非常時でも世界がイカれていると思うだろう。

ああ、俺がどちら様ってか。簡単に言えば、この娘に父親を殺すように仕向けた未来人ってところだ。殺伐とした未来で暮らしていたせいで「常識」とやらが俺にはわからない。だから、俺にこの娘を守る義務があるのかも怪しい。いやあるか。俺は「クリーチャー（化物）」に襲われて左肘から下を失った。この娘に助けられなかったら命さえ危ういところだった。未来人にも恩には恩で返す義理くらいあると言っておこうか。そもそも何で俺が約30年前の世界に落ちて来たか。そんなもん知るか、と言うのが現状だ。この時代に愛着もない俺だが、この娘を闘いに巻き込んだ理由はそれなりにある。この娘の父親が俺の住む未来の破壊者だからだ。「バイオロイド計画」…人殺しヒト型人工生物を創る計画だ。この計画の先駆者がこの娘の父親だっただけだ。俺は「未来を救う」なんて大義名分はない。「妹が泣かないですむ未来にしたい」だけだ。少女は俺の闘う訳なんて気にしていないように「人生はゲームにすぎない。成功するか、失敗するかは二者択一だ」と無邪気に笑っていやがった。流石は研究者の娘と思う一方で、それで廃人になって俺任せなんて酷いものだ。俺は妹にもう一度会うまで死ねないんだぜ。

「だから自分の命が惜しいってのに、何でユウナ：お前を守っているんだ。頼むから何とか答えろよ…」

富士の灰で車のエンジンがかかりにくい。唸る音だけがその場にあった。少女ユウナは人形のまま、刀を抱いて闇を見つめる。全く嬉しい気持ちになれないが、俺の知る未来史通りにこの国の終わりが近づいていた。2008年6月13日「京浜大震災」、その3日後

の「東海沖地震」と「富士噴火」。今日から3日後の6月21日に
関西が地震と地割れにより水没する。「日本の南北断裂」が予言さ
れる。そして地震発生地域には、例の如く「クリーチャー」共が蔓
延する。日本は食われるだけ食われて、8月29日に公的地図から
抹消され、国連の統治地域（実質上の植民地）になる。さらに負の
連鎖は日本だけに留まらなかったとも言っておこうか。

これらの事柄が何となくだが、「バイオロイド計画」と結びついて
いることに俺は気付いた。未来人らしくもない憶測だ。ただし東雲
教授の潜伏先が関西方面であるのは間違いない。政府が機能してい
ない世界はどんな機密情報だろうがだだ漏れだ。お国の情報管理体
制が混乱している分、俺は動きまわっても余裕だった。あの教授の
ことだから罠の可能性も十分考えられる。まあ虎穴に入らずんば何
とかってか。関西へ行く。ショック療法でユウナが目を覚ませばい
い。

時間をかけて冷静に考えれば、もっとマシな道を選ぶこともできた
かもしれない。無情にも俺らには残された時間がなかった。立ち止
まって考えると死ぬ！！お出まし。空からの襲撃者、翼手タイプの
クリーチャーが車を襲ってきやがった。ああクリーチャーってのは
6つ目を胴に持つバイオレッド肌の化物だ。コア（ヒトで言う心
臓に当たる）を破壊すればくたばる低能生物のくせに、あいにく俺
が運転で手一杯な訳で反撃することはマクロスがあっても不可能だ。
ユウナが正気じゃないのが惜しい。左の義手が疼く。

「糞が！う・ご・け！！」

車は間一髪で動き、奴らの餌食にならずに済んだ。この地方のライ
フラインが復旧しないのは奴らのせいだ。だがおかげでここ半日、
ヒトの死体は見ないで済んでいた。地獄で生きている実感が薄い人
間から消えていくシステムらしい。分かりやすいサバイバルゲーム

だぜ。

とりあえず名古屋から大津方面へ脱出できたのが、それから幾ばくしてからだ。日本全国に非常事態宣言下なので、自衛軍の関所にはわらわらと人だかりができていた。ここからクリーチャー感染者を出さない措置だろう。しかし、クリーチャーからするところ餌が集まっている訳だ。さてこうなると俺が軍職だということが便利になる。偽造じゃない臨時政府の通行許可証を見せ難なく通過した。東海地方へ向かう車両がないことから類推すると、残った難民共で食糧を奪い殺し合うのが目に見える。まあ俺の知ったことではない。それを聞いたら一番悲しみそうなユウナはやはり人形のまま、俺はこいつを岐阜の親元へ送って行くのだと嘯いた。奴らは気の毒そうな顔だった。本当に同情しているのかかなり怪しい。みんな精神的にどこかイカレちまっているもんだ。そんな時に自分の命以外を大切にできないのはお互い様だ。俺自身そうだ。自分の命＋α（ユウナ）のことしか頭がない。それでも通行許可に1日半かかった。使えない亡骸共にひとまず感謝しておこう。生きるのが辛くなるのはこれからだ。俺は覚悟を決めた。人形ユウナにその覚悟を聞くことはできない。ただし未来人の俺に無言はYESと同じだ。「お前なんかと一蓮托生できるか」と東京にいた頃のユウナなら語っていたかもしれない。俺も死ぬ気なんざ更々ない。前言の通りだ。

>大津ー京都ー大阪府内

ここはどこかの戦場の前線基地なのか。人氣がなく、どことなくぴりぴりした空気が街に張り詰めている。忙しくUNの腕章をした治安維持軍の兵士が巡回している。たまに穴掘りをしている邦人の姿もあった。対クリーチャー用シエルター。そいつは、東北一越中ー関西ラインで急ピッチに作られている。まあ明日の悲劇について口出しして混乱させるのも悪いだろう。俺は運転疲れの目に手をやった。ちらりと助席に目を向けたが、ユウナとはやはり目が合わない。

い。が……。コホン。俺は驚いて視線を戻した。ユウナが咳払いをした。俺はもしや彼女が戻ってきたのだとばかり思った。そうでもないのが現実だ。

「ひどい熱じゃねえか：お前なんでこうなるまで俺に言わなかったんだよ」

俺は子供を叱る口調になっていた。ユウナの虚ろな目がさらに深い闇の中に沈んだ。後に知ったのだが、ユウナは「京浜大震災」の時も体調を崩していたらしい。このときの俺がそのことを知る由もなく、迫りくる運命をいたずらに受けることになってしまう。

「いいか、何があってもここから離れるんじゃないぞ。ここで待ってろ、必ず戻る」

約束というものは時に自分自身の足枷となる。俺は解熱剤を求めて奔走した。形振りには構わない。ユウナにも俺にも未来にも時間がない。俺は関西水没の話「シエルターの悲劇」を知っておきながら、人気のない街でヒトを探した。もっと深く考えるべきだった。日本全土に敷かれる戒厳令のレベルが高いとは。俺は最後の賭けでUN軍が駐屯する府立中学の校庭へ侵入した。どうやらここは悩みある人間の駆け込み寺でないらしい。それはそうか。俺は明らかに不審者扱いされる行為をした。しかも性質が悪いことに、自警団の見張り連中がクソガキ共だった。ただですら非常事態で気が立っているのだ。彼らが外人（俺の見た目）と話せるわけない。

「話ができる大人はいないのか」

俺は上ずった声で彼らに尋ねたが、殴り飛ばされた。関西弁らしい罵声を俺は生まれて初めて浴びた。喧嘩っばやい俺でも本場ものは

怯む。それから殴る蹴るのエンドレスに突入した。「話を聞いてくれ」と正直言うのもウンザリだ。このままだと俺は確実にくたばる。正当防衛か仕方ない。がぶりとチンピラの一匹の腕に噛みついた。

「痛！貴様、何す…」

奴が手を上げる前に嘲る。ハハハハハハハ。演技開始。

「お前は感染したぜ。クリーチャー化したな…残念残念」

もちろん感染するはずない。俺らは検疫をパスしている。だがそれが俺が望む交渉手段になることなく、奴らに仲間割れという名の殺し合いを演じさせる羽目になった。奴らの一人、金髪の少女が俺の手から叩き落とされて地面に転がっていた銃を拾い、噛まれた腕を押えてうずくまる少年を躊躇わずに射殺した。俺は彼女の標的になるのを恐れて逃げた。直後に彼女の行為に逆上した少年が、彼女の叫び声と共に脳漿をぶちまけて倒れた。俺は余程自分の命が惜しかったのだろう。「止めろ！」と映画俳優のようにこの暴走を止めることもなく、身を伏せていた。彼女は仲間を殺しつくした後、頭に銃を当て自殺を図った。しかし弾がなくカチリと鳴っただけだった。俺はすすり泣く彼女の行為にただ呆然とするだけで役立たずの人形だった。彼女はヒステリーを起こした。いつかのデジャビュだ。

「何でや！何でうちかてわかったの！！」

俺はその言葉の意味を理解するために、なぜ彼女が仲間を裏切ったのか尋ねる必要があるとややあって気づいた。が、彼女の方が口早い。

「ほんまはうちが化けもんの感染者や」

「そ、そうだな…妙な既視感がある」

「そやろ。うちかて、あんたが忍び込んだとき助けたかった…やて、あんたはうちとおんなじかて気付きおった。これはあかんと思ったの。仲間なんて所詮こないなもん…うち、もうあかん…」

「聞くところお前は西の人って感じだが、感染した理由が今一わかんねえ。それにウイルス不活性型保因者なんてな」

少女は涙で赤くなった目で俺を見上げた。何となくこの少女もユウナと同じ匂いがする。少女は言葉に困っているが、それ以上に俺も困っていた。やれやれ。

「残念だが、俺らがクリーチャー感染者だってことは事実だ。そしてお前がどこの何者であれ、聞くことはただ一つだ。解熱剤を寄越せ!!!」

少女は首を横に振った。物分かりの悪い娘だ。

「わからへん。あんたは何者やねん？」

質問返しかよ。要求したのは俺の方だ。俺はかなり苛立っていた。ユウナに時間がない。それにここは幾ばくもなくして悪夢の海の底だ。

「もういい！世の中なんてなあ平等なんて有り得ねえんだよ！！めんどくせえ、お前を自衛軍に突き出してやる！！数時間後にみんな仲良く海の底で死んでろ！！未来人だからって俺が何でもできると思ったら大間違いだ！！」

すると少女は立ち上がりポケットから何かを掴み取り、俺の胸に叩きつけた。抗クリーチャーウイルス剤だと、まさかこの時代で完成しているとは。

「それ持って未来にいねよ！うちかて人の子やもん。あんたとちゃう！ほんま、はらわた煮え繰り返すわ！！」

俺は抗ウイルス剤を持ってその場を立ち去ることができなかった。それは俺自身、本当は何もできない糞野郎だってことを叫んでしまったからだ。俺は少女に言われた通りの人でなしだ。ユウナを騙して廃人にして、終いには妹を出汁にして俺は無駄に生き続けている。そして俺の時間を少女に奪われることさえビビっている有り様だ。

「いつから俺はこんなに腐っちまったんだ：自分のだけ考えて、他人との約束を守れなくなったんだよ」

少女は俺に返事をしなかった。ただそこに立っている人として俺に言った。

「死体をないないするの手伝ってくれへん？うち一人や無理やもん」

冷めた視線がユウナの人形のような黒い瞳と重なった。俺は黙って体育館裏の倉庫に運ぶのを手伝った。生温かい肉が俺に罪の意識を覚えさせる。

血の跡が残る校庭に俺らはまだ立っている。俺は少女にもう用はない。そして、少女も同じはずだ。2人とも離れる機会を失ったつてか。少女は弾切れになったはずの俺の銃を投げ返した。おいおい暴発したらどうする。俺の慌て振りに少女は失笑した。

「なんや、うちら縁ができたよったみたいな。うちは錦織鋒織ニシオリホウセンつてゆー名前やねん。あんたは未来人って言わなはったな。何や未来の話をしてよ」

少女の気の変わりように俺はただ苦笑した。俺はユウナに説明したこととだいたい同じようなことを碎いて話した。地震とクリーチャー、そして時間断層のこと。ホウセンはちゃんと聞いたか曖昧な反応をした。女ってのは理由を聞きたがる割に聞く気ないのか。今のユウナを羨ましいとホウセンは言った。仲間を信じれないで殺した…んだよな。俺は一瞬目を逸らす。

「あつと…今日中に地震でこちら辺一帯は水没するぜ。逃げんならめんどくせえから一緒に来いよ」

「当然や」とホウセンはマスカラで二倍化した目で睨む。関西の女怖え（笑）。あんね、と釘を刺すホウセン。

「キールはあんたはんの姫を大事にせえへんとあかんさかいに。うちとおんなじ境遇ならユウナちゃんはそのないに強くあらへんわや。きつと孤独でしゃあないはず…ちゃんって謝りなさいよ！ええな！」

「あ…ああ…」返事がまともにできない俺。

「ほな行くで！うちの話はユウナちゃんのトコまで走りながらな！」

走りながらって…俺は関西っ娘の行動力と言動力は並立するものだと初めて知った。だから俺が余計に息切れしているのかと思った。ホウセンは幼い頃に両親が育児放棄して、研究者の養父家族に引き

取られた子供だった。その研究者の養父と折り合いが悪く、常に衝突していたらしい。まあ余計に悪いことをしまくって、構って欲しかったってか。研究者って人間が自分の仕事だけに生きているのを知らずに。過去形だが、ユウナは研究一筋の父親が大好きだった。一方でホウセンは実の親でない他人の養父を毛嫌いしていた。だが今年に入って間もなく、中学に入ってから絶縁状態だった養父から話があると手紙が届いた。養父の家族の相次ぐ訃報を親族伝いに聞いていた。「またうちは親に捨てられへんの？」最悪のパターンが脳裏を過った。彼女は慌てて家に戻った。そこで黒服の男らに襲われ気を失い、ユウナと別ルートで抗ウイルスを打たれ被検体となった。彼女は養父に裏切られ逆上した。数日後、観察に来た養父の首に噛みついた。殺すつもりはなかった。せめて歯型程度が出来ればいいと高を括っていた。しかし、養父は見る見る内にクリーチャー化していった。彼女は怖くなって机の下で震えながら、化け物が他の研究員を嬲り殺し、自らも全身から血を噴き出して死んでいったのを見ていた。その後、彼女は特別拘置所に収監された。東京で地震が発生してクリーチャーが現れたニュースが入って来た時、彼女を恐れた看守が何をとちったのか鍵を持ったまま殺しに来た。牢を開けた瞬間、看守の手を噛んだ。看守は全身から血を噴き出し死んだ。彼女は脱走に成功した。そして、彼女の母校の生徒を脅し仲間にして、今に至ると。

「これは…ゼイ…俺の推論なんだが…ゼイゼイ…関西地方の戒厳令フェーズが高いのは…お前のせいかな…」

「ほんまそれや。うちらが関東へ逃げるかどないやかでもめよったトコにやってきよったのがキールやったの」

つまり俺は今爆弾を抱えつつ、爆弾を取りに戻っている。俺は車が全く走っていない交差点のど真ん中で転んだ。何だ、この違和感。

道路のど真ん中に亀裂だと。

「どないしたん。何なん、こないなひび割れでコケるなんて自分ド
ジやな」

俺

はジーンズの膝が擦り剥けていないのを確認して、埃を叩きながら
立ち上がった。

「なあ…嫌な感じしないか」

「まあ、こないな亀裂は先週までなかったんやろな。ここの通りで
事故があったなんてうちは聞いてへんし…」

しいと俺は唇に人差し指を当て、おしゃべり娘を制した。声を潜め
言った。

「おかしくないか。お前が銃をぶちかましていた時、見回りしてい
たはずの軍人共は誰一人駆けつけなかった…何故だと思う？」

「焦らさいで。うち阿呆さかいに、わかんへんって」

少し遠慮して溜息を洩らす。

「軍人さんも戦闘中だった、が答えさ。そして、クリーチャー感染
者だけが感じる波長ものがここにある」

「あ！そないな…キール何すん…」

俺は声のボリューム調整ができない関西っ娘の口を手で塞いだ。ち
いっバレたか！敵の形は想像したよりも小さい。何だ、今まで見た
ことがない四足歩行だ。

『グヴァアアア!!』

俺の義手となっていた左指三本をそいつは食い千切った。

「キール!!」

「大丈夫だっつ! 左腕はとっくの昔に義手だ。だが、犬がクリーチャーだなんて予想外にも程があるぜ!!」

「かんにん! それやったのうちや、あいつら脅すのにやったの!!」

「Fucking!!」

俺は工事用ポールをワンコクリーチャーにぶちかました。腐れガキが! 言うのがおせえんだよ!! 待て: : : と言うことは関西中のワンコが全匹クリーチャーか。そうかホウセンの親父さんが研究していた段階じゃ、ワンコくらいがせいぜいだな。人間様は噛まれると大半は全身噴血でくたばる訳か。四足歩行の素早いクリーチャーとは厄介だぜ。ワンコ抹殺のために、俺はユウナとの約束を後回しにするしかないと悟った。現実は甘くない。ああナイトの身は不憫だ。毒りんごを齧ったお姫様までクリーチャー化してしまう急展開だ。この後、俺は自分の覚悟の無さに打ちひしがれる羽目になる。

>大阪府内ー08年6月21日

死んでいる。流れる蛆: : ウジ? いや、蛆は流れやしない。じゃあこの赤い液体は何? 鉄臭い鮮やかな赤。血だ。血を全身から噴き出し、地に倒れ伏し仏になるのは自衛軍の兵士だけ。幸いと言えるかわからないが、一般人の骸は陽の下に確認できなかった。死体は噛み傷の他に、鋭利な得物で斬殺されていた。それにユウナが車にいない。

信じたくなかった。俺は顔を顰める。約束を守らなかったのは、それでも俺になるのか。ああその話は後にしよう。今は現実を受け入れるだけだ。幸いに車内に荒らされた形跡はない。ユウナが暴徒に引きずり降ろされることなく、自発的に降り立ってことか。ああそうか、暴徒になるような人間はみんなシェルターに隠れてしまっているんだな。ハウセンに比較的扱いやすいハンドガンを渡しそうとしたが、彼女は伸縮ロッドをひょいっと勝手に掴んだ。おいおい、対酔っ払いおっさんじゃねえんだぜ。まさかと思ったが、一応尋ねた。浅はかな俺の思考回路から出た答えと同じだったのは言うまでもない。

「止めとけ…その細腕がクリーチャーの攻撃で痺れたら、逃げる間合いもなくサヨナラだぜ？」

俺の気のない説得のせいか、ハウセンは気丈に笑った。

「いけるやちゅーねん。うちかて、たやで負けへんわ。人間以外かて勝つ」

少女の目が据わっている。俺は彼女を信じるしかなかった。ユウナ（人間）がクリーチャー化している場合はすぐに逃げることだ。情は持つな。状況によっては正当防衛を取れ。20年後じゃ当然のルールだった。奴らは何れ自滅する（クリーチャーは3〜5日で肉体が融解する）。待つのが上策だ。奴らと正面から戦って無傷（感染しない）で生きられる人間は、この世にいない…いないんだ。俺は現実を無理やり飲み込んだ。ハウセンと二手に分かれてユウナを探索することにした。携帯で定時的に連絡を取り、かつここに30分後戻ってくることに決めた。

携帯のバイブさえ恐怖だ。近いのか、ユウナ頼むから生きていてくれよ。

「おったで。キールがゆうたのって、おんなじ黒ツインや」

珍しくひそひそ声が返ってくる。受信音の向こうで銃声が鳴り響いていた。

「そないおっきー声で話さいでよ。うち、今死んや振りしとるさかいに。ただでさえ、おっきー道路で隠れられへんし、洒落にならんのよ」

大きい道路：俺の携帯P Cから判断すると、ちょうど県境か。何かあったのか、携帯はブツリと断末魔を残し切れた。ますますヤバイ状況だぜ。つーか、俺を走らせ過ぎだろ。色んな意味で心臓の鼓動が途絶えそうだ。

「助けてくれ！」

自衛軍の奴らが例のワンコ共に襲われていた。しかしその全員、全匹感染体だった。時間がないんだ！失せろ！！この時代に生まれたお前らの悲運を呪え！！俺は掃射で皆殺しにした。血の雨が降ろうが俺に後退は許されない。

大きい道路。そこには俺の殺した生物とは違う程度で骸の残骸が散らばっていた。ギタギタに切り刻まれた肉片。未だに信じられないが、元の形がわからなくなるまで殺戮行為をしたのは「キールがゆうたのって、おんなじ黒ツイン」だった。かわいらしいお人形が突然殺人鬼になる話は、この歳になっても俺りゃ勘弁だ。ガードレールに生々しく血糊。まるで車がヒトを撥ねて引きずり殺したような。俺はその下に鮮血に染まった少女を見つけた。彼女の元まで歩み寄ると、何とか息はあるようだった。

「ホウセン…?」

「…なん、キール? うちもうギリギリや…四肢…繋がつてるのが奇跡な…」

この泥々して湧き上がってくる汚いのは何々だよ。俺の裏切りの罰か。後悔の念より理不尽な現実^{よつつ}に苛立ちの方が格段に上だった。気付けば撃鉄を起こし、全てを裏切ったあいつへ向けてぶちかましていた。止めようがない怒りが俺を盲目にした。

「ユウナあああっ!! フザケルナああっ!!」

全て人間で言うところと心臓を狙ってぶちかました。焼け爛れたような赤い皮膚から、どす黒い血を垂れ流しながらそいつは嘲^{わら}っていた。奴の反撃は想像以上に速く、そして鋭い。クソ、虎徹^{かたな}が右腕と同化している。左耳を僅かに肉が繋がる程度に斬りつけられる。手の甲を抉る。正確な部分攻撃…異常な野郎だ。自分の力を誇示するように、じわじわ相手を痛ぶる。ユウナと言う人間が母体だからなのだろうか。このクリーチャーはかつて経験したことがない理性^{ヒトらしさ}を見せつけてきた。それも醜い、醜悪だ。

「嘲^{わら}うな!! お前に嘲う権利なんてない!! 二度と俺の前で嘲うんじゃないねえ!!」

俺

は死に際に何をわめき散らしているんだ。俺の腹が抉られ、生温かいモノが噴き出す感じがした。

『ユウナ、何故俺の言った通りにお前は車で待っていなかった?』

…そうか、お前は…俺の嘘に気付いたか…

俺はもはやこれまでと悟った。死ぬ前の置き土産に俺は、ハウセンから受け取った注射針をこのクソ野郎の胸に渾身の力で突き刺した。俺の人生は何だったのか。過去に干渉したばかりに出口を失った。俺の行動は未来をぶち壊したかもしれない。俺の未来にバイオロイドがいたって良かったんじゃないか。何で未来なんか：違う！それより、妹は、俺の妹は誰が守るんだよ。俺が死にたくないと思うほどに意識が遠退いていった。

全てが手遅れになったことを知った。その日の内に関西は水没し、シエルターの難民は地獄の水攻めから逃れる術なく、悪夢の海の底に消えた。死者行方不明者は数百万人になったと聞く。

>福岡第一夜

私は戻った。けれども一体何が戻ったと言えるだろう。心を失った人形になり、それでも人間に戻れなかった。正直に言うと、私が化物になった記憶は断片的にしか思い出せない。たぶん私は思い出すともう一度クリーチャー化してしまうと恐れているのだろう。恐れる？何を今更恐れることがあるうか。裏切り、裏切られ、そして他人を信じない獣になった私は、自らの運命を呪った。まさか、また父と行動を共にするとはね。ふふ、父と共に未来へ復讐をする自分の運命を嘲っている。しかしあの時父が自衛隊のヘリコプターで私を回収しなければ、私は今頃関西と共に海の底で心中していた。08年6月21日、あの日に福井の若狭湾から琵琶湖、関西中心地を通り、紀伊地方まで巨大な地割れが起きて水没した。日本列島は南北に分裂した。ここで大事な事は首都機能を維持できる「関東・東京地区」「中部・名古屋地区」「関西・大阪地区」は壊滅したということか。その原因は、公式には「京阪地震」だ。しかし、クリーチャーの攻勢を阻止しようとした国連軍の核による攻撃ともうわさが流れている。結果として北日本のクリーチャーは旧東京地区以外掃討されたらしい。

代償は南日本のクリーチャー病の蔓延だ。私が身を寄せる父の研究所がある福岡でも、一日に平均2人のペースでクリーチャー病で人間が死んでいる。

「日本国が消滅する日が近いんだよ」

と父は心成しか嬉しそうに語っていた。何故？私はその真意を知りようもない。ただこの国に何の思い入れもないからではないだろうか。私はそんな父へ何の思い入れもない。表面的な笑顔ももう終わりになるのかもしれない。

「お父さんは私が怖くないの？」

そう語りかけた私に父は素っ気なく返事した。

「研究対象の一つを恐れる研究者はいない」

この人は自分の研究に呪われてイカレた。クリーチャー化し損なった私は、さぞ面白い研究対象だろう。

「つまらない小物を見て笑う子供^{ガキ}だ」

私はさっさと父にコーヒーを煎れ、軟禁部屋に戻る。父は毒物の混入を確かめもせずにコーヒーカップに口をつける。そういう人間だ。私の敵意もろとも感情が実質を伴っていないのを知っている。

「初めから牢獄の鍵を持つ囚人は、それでも囚われの生活を望むか」
と私はつぶやいた。部屋に足を踏み入れた時に私の顔を舐めてきたのは、犬ではなく人間の形をしていた。彼女は四足歩行^{いぬ}型のクリー

チャーウィルスで人としての理性を失い家畜と化していた。首輪をつけて裸でも抗うことなく従順だ。少しばかり彼女が羨ましい。それは家畜は研究対象として何も考えることがないからだ。頭を撫で、手で髪を梳いてやるとワンワン喜んで頬ずりして甘えてくる。

「ハウセンいい子だ。お前は所詮家畜以下の研究対象だから、せいぜい吠えてろ」

私に感情がない：訂正したい。憎悪、不安、他者への優越感及び支配感という人間らしいマイナスの感情を私は持っていた。

部屋には必要最低限のモノしかない。犬というより四足歩行する姿が赤ん坊のようなハウセンを眺めることに私は飽きていた。何をする訳でもなくただ宙を眺め、たまに独り言をつぶやく。最初は監視カメラを欺く演技だったが、もう自分自身への慰めにもならないと悟っていた。罪を語るのは救いを求めているからではない、ただの気休めだ。私が日本刀を突き刺した男は、その状態で生きていた。仮死状態の男を父は面白い生物だものと手を叩いて笑っていた。私が作った罪を父は褒めてくれた。素直に喜んだ。ただそれだけだ。

「未来あすなんて信じない。私がここに存在するのは、過去と現在の延長でしかない」

未来人キールを殺し損ねたことは、私に贖罪を意識させるのに十分だった。その時、私のつぶやきにあっけはいけない返事があった。

「お母さんは嘔吐き」

その一言に私はひどく恐れを抱いた。空耳であると信じたかった。まさか家畜がタイミングよく人間の言葉を返すなんて有り得ないことだ。動揺で私の理性は飛んだ。どんなにハウセンの身体を揺すっ

ても、叩いても、私が言葉で罵っても、家畜はワンとしか鳴かなかった。私は動物虐待をしているような気持ちになり、何が何なのかわからなくなり疑心暗鬼になった。私は痛めつけた彼女の身体を労わるように撫でた。こんな気持ちになったのは初めてだ。

「許してください。今の私は疑うとこしかわからないの：」

遠回しに反省の言葉を言っても「ごめんなさい」の一言が言えなかった。そのことで私はひどく傷ついた。ハウセンに手の指先を舐められると余計に胸が苦しくなった。

私はハウセンを人間らしい生活に戻してやりたかった。まずは人間の生活に慣れさせることだ。ハウセンは服をすぐ脱ぎたがり、私はただ笑うしかなかった。サルでもわかるようにモノを教えるのは困難を極めた。なまじ感情があるばかりに反抗してくる。教える人間を嘗めていると思えない。何故嫌がるんだ！お前は何故私を嘲うんだ！！ハウセンの悲しげな表情に思い止まった。私はまた手を出すところだった。私は馬鹿者だと膝を折って泣いた。

＞福岡第二夜

鎮静剤投与から目が覚めたのは、月がちょうど変わった頃だった。ウィルスのせいだけにはしたくないが、あの頃の私に比べると破壊欲求が高まっているのかもしれない。私は自分自身に嘘はつけない。少しでもストレスが溜まると、見境なく周りのモノを壊してしまう。割れる試験管の音だけ覚えている。目が覚めたら手足を縛り上げられていた。私の素肌に血の臭いが僅かに残っていた。項垂れた。また、アレになったのか。牢の向こうに他人の気配を感じた。

「嘔吐き」

プチ。理性が崩れた。ドラキュラに十字架。私は金切り声を上げて

暴れた。

「違うのっ！違うのおおっ！！」

がちやがちやと鳴る手錠と足枷。「嘔吐き」という言葉が、次々と私の血管の中へ入り込もうとする。ただでさえ狭い道なのに無理やり押し通そうとするものだから、想像を絶する痛みが全身を駆け巡った。

「痛い痛いっ！！痛いよおおっ！！ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいああいいいいっ！！」

このような事態にも関わらず誰も駆けつけてくれない。一体何故なの？父たちは、私の監視よりも私の苦しむ姿を見たいのだろうか。まだ私が「特別」なんだと思っていた。私は徐々に引いていく痛みと反比例して、子供のような甘えがやってきて私の胸を押しつぶした。痛いよ、辛いよ。すると牢の錠が陥おちる音がした。ガチャン。私はそれが私の死刑執行の音のように聞こえた。目を真開く。シン…。ややあって関西人の女の声が返ってきた。

「泣かないだっちゃ？ ユウナちゃん、うちからのお土産や！」

ニイッと笑って見せる少女は全身黒で統一された軽武装をしていた。差し出されたのは、私の黒の武装服とキールに刺さっていたはずの血吸い刀「三代虎徹」だ。それよりヒトの理性を失ったホウセンが人間らしさを取り戻している。私は言葉を失って、茫然としていた。ホウセンは変な目で私を見る。

「自分：はよ服着たら？素っ裸で歩きたいんか？」

ようやく私は自身の恥ずかしい姿を認識した。というか、昨日まで理性を失っていた娘に言われたくないよ。私がいそいそと服を着ている間、ハウセンは私の髪をツーサイドアップにしてくれた。正直、幼くなるから私の髪を結うのは止めて欲しい。この四足歩行女はいつ人間になったのだろう。：そんな疑問は口に出して聞けるはずない。しかし私の表情で伝わってしまったらしい。当のハウセンは気にしていないようだが。

「うん、うちは最初からフツーやったよ。アレ全部演技な。わんわん、何ちゃって」

わ：私は騙されやすい体質なのか：。ひどく落ち込んだ。重い溜息。取り繕ってハウセンは身振り手振り弁明する。

「ちやう、ちやうよ！ユウナちゃんは秀才やろ！ねちっこく説明しなきゃあかんやけど、時間があらへんの！キールが時間を稼いでくれとるの、その間にうちら脱出せえへんと！」

私は「虎徹」を拾った。疑わしきは疑うべし、が私のモットー。よって、ハウセンののど元に刃を向けた。

「状況は理解した。さっさと私を導け、このメス犬が！！」

「へえ、ご主人様。その前にその刃を納めてもらいまへんか。恐ろしくて、犬めはご案内致しかねまへん」

い
つから私はSっ気が強くなったのだろうか：ううん、考える時間も惜しい。今はここ掘れワンワンと行こう。私は先導するハウセンの後に続いた。私は自分自身を納得させる理由づけが、意外と面倒なことに気付いた。「虎徹」が研究所の廊下だと無用の長物だった。

仕方なくハウセンがどこからか失敬した銃を使うことになった。私はこの手の武器が駄目だ：まあ人並みに使えるのだがそれ以上を越えない。何より遮へい物に隠れての銃撃戦が嫌いだ。ハウセンが小さく何かをつぶやいていると思ったら、数を数えてタイミングを図っているようだった。彼女の眼は3Dモニターのように小刻みに動いて敵を把握している。ロックオン、大腿を射抜く。私は犬とか、能ある鷹を飼っていた気分だ。ハウセンと銃の組み合わせは、鷹と爪より強力なペアだった。

「ユウナちゃん、気い抜いたらあかん!!」

「背後を取られたことはない：が、何か問題でも？」

私は振り返ることなく、背後の的を撃った。鷹クラスとはいかずとも、私も勘が良い方だ。ハウセンはちよつとシュンとした表情になった。主人として聞いておこう。

「いやあ、ユウナちゃんのセンスの良さに、うちの立つ瀬なあらへんねん」

「当然だろ。主人は飼い犬に噛まれないものだ」

「うわあ：自分若干腹立つわ：」

「Hold up your hand!!」

「嘘や！かんにんしてご主人様！犬めは人語が上手くおまへん」

軽く漫才になっているが、私たち2人のリアクションに天と地の差があることを想像で埋め合わせてくれ。言っておくが私は淡々と本

気で話すぞ。そして、この関西女はヒトをおちよくるのが好きなようだ。

血の臭い。どうやら階段を降りた向こうから続いている。私の暴走の一端を担っているのが、血の臭いだった。当然私の脚は竦む。ハウセンは何やら必死に私を説得するが、全く耳に入らない。ややあって、彼女は恐いくらい優しい笑顔で語りかける。

「また逃げるんか…弱虫」

「…!?!」

睨み返しても、言葉にならない。ハウセンは続ける。

「自分がどれだけ周りのヒトに氣い遣わせてるかわかる? この下でうちの退路を守っているキールに失礼やで! せやから、逃げたらあかん! ユウナちゃん闘いなや!」

そうだよ、怒られる暇があるなら進まなきゃ。それに、私はキールに言わなきゃいけないことがあるんだ。私の前に現れたのは予想通りと言ったらいいか。半分クリーチャー化したキールというクリーチャーだった。足元には私の元へ来なかった看守の死体が散乱していた。私の中の全ての勇気が火を灯した。もう逃げない。「虎徹」で自分の左手首の動脈を切った。かつて父が言った…私の血がクリーチャーウィルスの血清となる。「笑うな」と私に言ったよな、キール。その答えはNOだ、私はヒトであるために笑い続ける。刀を軽く振るい切っ先を目の前のクリーチャーに向ける。飛び散った血が廊下に新たな赤い斑点を作った。肉片を食っていたクリーチャーが私を見る。恐くない、私は嘲えるぞ。

「ユウナちゃん! 目の色が紅になってるで!!」

そうか、私は『覚醒した』んだな。何もヒトとして悪いことではない。

「キールううっ！フザケルナああっ！！」

全て人間で言うところと心臓を狙って一撃^{つぎ}を入れた。焼け爛れたような赤い皮膚から、どす黒い液体を噴き出してそいつは沈黙した。死合終了。目から熱さが消える。どうやら私の覚醒も終わったらしい。

父の姿はすでに研究所内から消えていた。ホウセンは気絶している大男を軽々と背負った。これもクリーチャーウィルス^の力なのだろうか、それともこの女の地の力か？そんなもの所詮些事だ。強いと言えば、私たちと入れ替わりに突入してきた中華軍（国連軍）と鉢合わせになるような、後手後手にならなかったことに感謝するくらいだ。

>福岡最終夜

空気が重い。無理もないか。キールは私に二度も殺されかけているし、私はキールに最初から騙されていて「覚醒者（人外）」になったのだから仕方ない。しかし、化学の世界でもそうであろうが、失敗の積み重ねが思わぬ成功を生むことがある。つまり、結果a l l r i g h t ならば、水に流してもいいだろうってことだ。そうは言うが、私たちはヒトの心を持っている。感情論は面倒だ。自分からどうすることもできない。人間代表のホウセンが助け舟を出す。

「なあ、たいがい2人とも仲直りしたらええやん…」

「もうしたよ！！」

二重唱。そうなんだよ。私とキールだけなら日常的な会話くらい生

まれてもいいのだが、ハウセンという第三者がいることで互いに意地を張ってしまっている。もう情けないほどヒトらしい。ハウセンはこんな頑固者共にある提案をした。

「言葉で分かり合えへんなら、拳で語り合いな。自分らの仲直りの儀式や」

確かにそれも有りだ。民主主義だって所詮は契約だろう。しかし、男が女を殴るのはどうかな。ここは民主的に「腕相撲」でケリをつけよう。もちろんキールが手加減してだ。私の小馬鹿にした視線にキールは毒づいた。

「ああん？化物に男女の区別はあんのか？下らねえプライド捨てて掛って来いよ、タコ娘！」

机の上に肘を置きFUCKのポーズをとるキール。流石にカチンと来たよ。

「主人がどちらか決めようか。言っておくが、私はかーいい子しか飼うつもりはない」

散々罵りあっておきながら、机が粉碎して試合は強制終了した。お互いハデに転んで、新喜劇通のハウセンから駄目だしされた。いや、突っ込む前に「大丈夫？」の一言くらいないものかね。まあいい、犬にそこまでの能力を期待していないから。私は埃を被った椅子に座った。私たちは、国連軍からテロリスト扱いを受ける逃亡犯なのだ。これからどうしようか。キールは私が女の子らしくないチンピラ座りをしていることをスルーした。

「しばらく表舞台から姿を消した方がいいだろう。そうだな、敢え

て反日の半島に亡命するのも手だ」

朝鮮半島、大韓共和国かんこくか。中華帝国の属国に亡命するのは私としては嬉しくない。恐らく、父が逃げるとしたら帝国だからだ。手が回っている可能性が無きにしも非ずだ。

「そうか、先方さんが妨害してくる可能性もあるか。半島の北に朝鮮戦争の後でゲリラがいるんだ。日本の首相クラスを手土産にぶち殺して、客人として迎えてもらおうか」

悪くないアイディアだ。私は正義のために戦うことにウンザリしていた。何より私たちがウイルスを日本中にばら撒くことに少なからず貢献しているのは事実だ。机上の議論はここまでにしよう。本題は、誰を殺したら私たちの利益になるかだろう。キールはさっさと言った。

「鹿島首相でいいだろう。戦犯のくせに首相になった野郎だ、北でも喜ばれる」

ハウセンの眉が僅かに動いた。飼犬が急に大人しくなったら主人は用心することだ。何か悪い病気に罹ったのかもしれない。私はハウセンに絶縁の意味で告げた。

「主人を裏切るならタイミングをしっかりと謀ることだ」

ハウセンは何も答えなかった。この少女が本当は何者かなんて父のファイルで知っていた。今更、顔色を窺うまでない。最大に用心するべきは、腹の内。

AFTER<2008年8月29日―日本国は公的地図より抹消さ

れた。世界史で有名な鹿島スピーチだ。

『我々日本国民がこの世界に存在した事実を世界60億人は忘れないでしよう。そして日本国がこの世界から消え失せようとも、人々の心に『大和魂』は永遠に残り続けるのです』

ついでに余談として言っておこう。この演説は私たちの首相暗殺失敗により歴史に残った遺物である。私は南日本エリア治安維持軍（中華軍）に捕らえられ、岡山刑務所送りになった。邯鄲の暇つぶしの始まりだった。刑務所を陥とすことなどに1年もいらなかったこともある。キールは無事に北へ亡命したらしい。何故、刑務所にいるのに情報が入ってくるかって？それより律儀に看守もない刑務所で刑期を過ごす私を褒めて欲しいものだ。「身を隠すならこれでもいいだろう」とここにいない大男へ笑い掛けた。

「義姉様、その不気味な嘲いをお止めいただけませんか。他の受刑者様方にご迷惑かと存じます。クスクス…それに僕の力があってこそお姉様は自由なのですよ？」

私と瓜二つの顔の青年侯爵は上面の笑みと言葉を使った。

「黙れ愚弟が。その化けの皮を剥がすのも、もうじきだ…せいぜい心の準備をしているろ」

「お心遣い痛み入ります、お姉様」

愚弟と手懐けるまで苦勞した青年の耳を甘噛みする。愚弟はうつとり目を細める。糞みたいな女装奴隷だな。とはいっても、こいつ『如月鐔葵』はキサラギツバキ大韓共和国の若き総督代行という肩書を持っている。まあ、この後の革命を期待してくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925o/>

S.D.F.ZERO (1.5)

2010年11月18日09時49分発行